

# チベットと被災地に重なる思い

## 作家 渡辺一江

NHKラジオ  
明日へのことば  
2012年10月22日



わたなべ いちえ

1945年、ハルビン生まれ。89年に18年間の保母生活に終止符をうち作家活動に入る。

チベット、中国、モンゴルへ旅を続けている。著書に『時計のない保育園』（集英社文庫）、『チベットを馬で行く』（文春文庫）、『わたしのチベット紀行』（集英社文庫）、『風の馬 ルンタ』（本の雑誌社）など多数。『マガジン9条』発起人の一人。

チベットでは信仰の自由が奪われている。

10月のチベットの風景は、西は森林がなく雪がうっすり……北、東の森林地帯は紅葉が終わり一部では雪が降っている。2012年6月から7月にかけてチベットに行ってきたが、2018年以降状況は厳しくなってきた。格子のない牢獄状態。移動に自由がない。外人は入域許可書が必要。5人以上の同時行動が条件。

80年代に外人の観光がOKになったが、チベットには開放地区と非解放地区がある。現在は外人がこなくても中国人がくれば良いの感じになっている。

2012年9月12日に南相馬市に行った。もう元の福島には戻れないのでは……と思う。今までは3、4世代で住んでいたが若い世代はどこかに行き、年寄りだけが残っている。家族がバラバラになっているのが現実。災害が発生した時に泊まった宿が現地のボランティアの拠点になっていた関係で一緒に活動し始めた。

チベットは外からの政治力で自由が奪われている。人としての尊厳が失われている。チベット人の支えになりたい！……と思った。東北の被災地も同じ。外部の力で苦境に陥っている。チベットと東北の被災地は合い共通する点がある。

小さい頃からチベットのあだ名があた。1987年3月25日に保育士をやめて3月26日にチベットに向った。そのきっかけは、高野山で行われた公開シンポジウムに参加した際にチベット寺巡り旅行のチラシが入っていてチベット旅行にひかれた。お参りにくるチベット人と身振り手振りで触れ合うのが楽しかった。チベットの寺巡りは合わなかったが人と一緒にの野良仕事は心地よかった。

かわきたじろうさんがネパール調査にはいった。かつては西チベットの一部であった地域のルポルタージュを読みチベットについての関心が深まった。1959年にはダライラマがインドに亡命している。

1987年に一回目のチベット旅行をはじめてから毎年1から3回訪問、25年が過ぎた。1995年、50歳の時、馬でチベットを回った。50歳記念馬旅行、5ヶ月と20日間、チベット人の中にとけこめた気のなれた。ガイドと馬方と三人で移動。それまでは車だった。車では現地人とのふれあいが少なく馬にした。馬での旅行は、よそ者がきた……ではなく仲間がきた……の感じだった。もともとチベットは西と東の文化の交流点。7世紀には医学サミットが開かれていた。いきずらい場所なので秘境なんていわれているが秘境ではない。

今年の10/20までに焼身自殺者が59名。民俗の自由のためにわが身を捧げている……の遺書が見つかっている。

2010年以降はチベットの宗教、チベット語も消されようとしている。国家共通言語の中国語に統一される方向にある。社会が監視社会で人が集まるとすぐに公安がくる。人々は訴えようがなく焼身自殺という形で訴えている。政府はこの訴えをテロと言っている。

先日訪れた被災地で、津波に流された子供をいまだ探している親がいたが、自分は幸せだと言っていた……被爆量が高く、探したくても探せない家族もいる。チベットの人の心根と一緒。

チベット・ウイグル地区を対象にした西部大開発は格差をなくすためのものだが現実には違う。西部の水、資源は運びだされている。北京とチベットを結ぶ列車は資源を運び出し、軍の移動を容易にした。生活向上の名目に迷惑を感じている住民が多い。強制移住、強制定住化。ひずみが生じている。

2011年3月11日には自宅にいた。7月に花巻でチベット関係の催し物がありその後、ガレキの跡をみて自分の国を感じた。なにかしなければ……の気持で南相馬の六角に宿をとった。その宿がたまたまボランティアの拠点になっていて主人の大留さんに連れられ、多くの被災地の声を聞いた。

被災地の人の言葉で発してもらおうと「福島の声を聞こう！」の会を設けた。一回目は六角の大留さんと吉沢さん（被爆牛の殺処分を当局から指導されるも受け入れず）二回目は飯館村のコーヒー店の元村職員の市沢秀耕（しゅうこう）さん（57）の妻美由紀さん（52）。（一時退避するも今、再回）三回目はアイターンで丸森に入った太田さん。宮城県子供を守る会の代表。12月15日（土）14時～原発から7キロに住む木村のりおさんにでていただく（津波に流された下の娘さんはいまだわからず……）

故郷を原発で奪われた20キロ圏内のひと、30キロ圏内の人は多い。見た目は普通だが放射能が強く家に戻れない。チベットや被災地から沢山の古都を教えてもらっている。